「昨日も今日、明日も今日～時間を考える」

●築地本願寺で理屈で考えた

何年か前の4月下旬、だいぶ陽が長くなった夕方、故･伊東忠太博士設計のインド風建築で有名な築地本願寺の本堂外陣の椅子に、しばらく、ただ座っている時間がありました。

築地の寺に生まれ（1957年）、育った私には、そこは遊び場であり、やがて、聞法求道の場にもなりました。朝の勤行の凜とした空気、昼の法話会の穏やかな時の流れ、夜の雅楽のお稽古の親密感など、さまざまな雰囲気の本堂に何十年も接してきました。

ところで、そのときは、天井脇の明かり取りの窓ガラスから差し込む夕陽が、なんとも豊かな広がりをもって、まるでシャワーのようにステンドガラスに降り注ぐのを見上げていました。

その時は、寄贈された当時（1970年）、東洋一といわれた西ドイツ製パイプオルガンで、誰かが仏教讃歌の練習しており、私はその響きに身を包まれていました。定期的に行われるコンサートとは違い、私以外、誰も参拝者のいない本堂で、このような巡り合わせになったことを、ゆっくりと味わいながら、自分はあと何回、このような光景に遇えるだろうか、と先ずは思いましたが、「いや違う、このいっとき以外、私の生きる時間はどこにもないのだ」と、日頃聞いている仏教の時間論を頭の中で確認したりしました。

そして、私がここにお参りし育てられたように、このお堂で先立つ多くの方がたが、み教えを聞き、念仏を称えることで、心が育てられ、新しい仏教的な人格が育てられたのだろうなと、短い時間、春先の軽い雰囲気の中、理屈の中で感銘していました。

●「おまけ」に負けた

同じ日の夕方、築地から地下鉄で三駅先の人形町駅近くにある老舗のせんべい店に行きました。塩や海苔や醤油など、みりんの甘さのない、さっぱりとした味です。バラで、何枚か選んでいると、1枚土間に落としてしまい、ビニール袋の中で割れてしまいました。

落とした1枚も一緒にして、選んだ商品を籠に入れてお勘定を頼むと、中年の女性店員が割れたせんべいを取り替えようとしました。「そのままでいい」と言うと、「いや、割れていない方がいいよ」と言いながら、新しい1枚と取り替え紙袋に入れてくれたのですが、最後に、割れたせんべいを、「はい、おまけ」と言って入れてくれました。

うーむ、その鮮やかな、というか、気っぷの良い応対に、それまで、さんざん店員さんと会話をしていたのに「ありがとう」以上の何も言えませんでした。そして、「負けるが勝ち」とは、こういうことだと一瞬にして深く肯きました。

「おまけ」ですから、先ずはお店が負けたんです。しかし結果として、完膚なきまでに負けたのは私の方です。いやそれも、せんべい店の店頭で、こんなに気持ちよいやり取りがあったのだということや、分別の損得という計らいを超えて「いのち」響き合い、一つに繋がり合う大きな実感という「おみやげ」まで貰っていたようです。

●人身受け難し、仏法聞き難し

私は、確かに、私を育んでいる大きな自然の恩恵によって、この身を先天的生得的に恵まれました。まさに、「人身受け難し、今すでに受く」（礼讃文）です。

しかし、パソコンも機械（ハード）だけでは使い物にならず、必ずプログラム（ソフト）が必要なように、人身（ハード）だけでは充分に納得できる生き方になりません。

「仏法聞き難し、今すでに聞く」というように、後天的学習的に、さまざまな因縁によって生かされているという道理の教え（ソフト）によって、私の「いのち」に気づかされ、育てられてきたのだと思いました。

仏教では、現在とは別に、過去や未来がどこかにあるのではなく、過去も、未来も、今においてしか存在しません。今、ここで、過去が、未来が受けとめられるのです。ある先生が「昨日も今日、明日も今日」と言われました。

今の私は今までの私の結果です。今の私がこれからの私を決定しています。いずれも、今から見てのみ、昨日も明日も、過去も未来もあるのです。ある日の夕方、そのような今、「現在を私たちは生きていると目ざめて生きていけよ」と教えてもらいました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。